

今回の教育研究助成金は私の研究の成果を個展という形で発表することで完結させるべく進めてきました。従ってここでは、個展開催までの経過を発表作品の制作の経緯とともに報告いたします。

「人の視覚の代わりとして捉えられることの多いカメラのレンズ。撮影を通して人間の目（網膜）での色彩や明暗の認識とレンズを通しての再現性について研究する」

このテーマ自体は私が 2008 年頃から自身の制作スタイルメントとしても掲げています。

写真とは視ることである。

視る事を通して知覚出来るものを整理し、自らの経験と照らし合わせその差異にきづくこと。

カメラという機械の眼によって一元的に切り取られる世界であるその反面、己の眼が脳と直結し感覚的に判断しているという曖昧さ。

それらを明確にするための表現。

この文章の中で私は意図的に「視る」と表現している。「みる」という漢字は、見る、観る、診る、看るなど他にも使い分けることが出来るが、私が写真という媒体を介在してものを知覚するのは視覚として「みている」と考えているからである。

では視るというのはどのような体験なのだろうか？ 普段ものをみる時に実は私たちは理解の多くの部分を経験則に委ねている。人間の仕組みというのは実によく出来ていて、多くの事柄が曖昧に都合良くそれぞれ適当に調整されているのである。

一方カメラという機械は 10 数年ほど前（2000 年代



2019

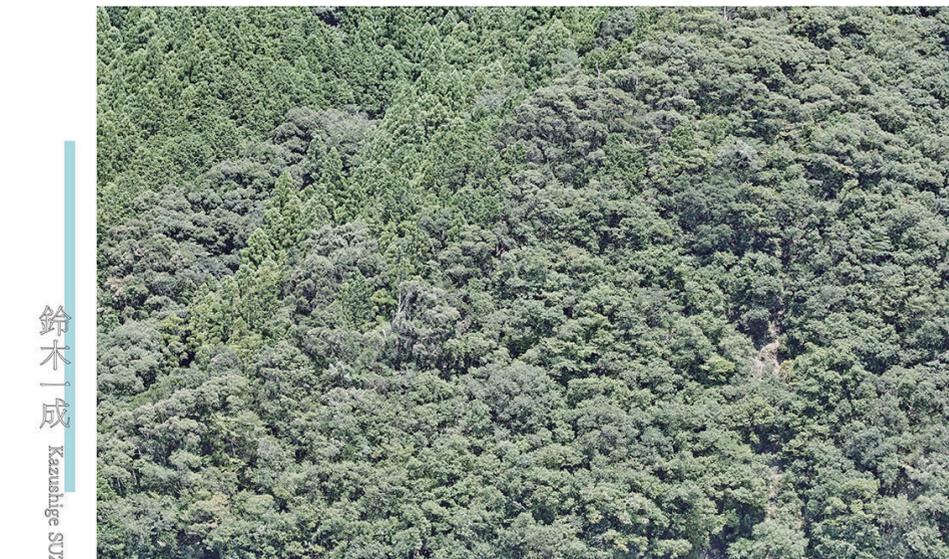
9.13 (FRI) — 28 (SAT)

12:00 — 20:00

Closed: Sunday, Monday

空色と水色／風を眺める

Sky Blue, Aqua Blue / View the Wind



鈴木一成

Kazushige SUZUKI

hprp TOKYO GALLERY

東京都港区南青山5-7-17 小泉美術館B1F  
Tel: 03-3797-1507  
CLOSING PARTY: 9.28 (SAT) 19:00 - 21:00

全デザイン・写真・制作 丸山 明希子

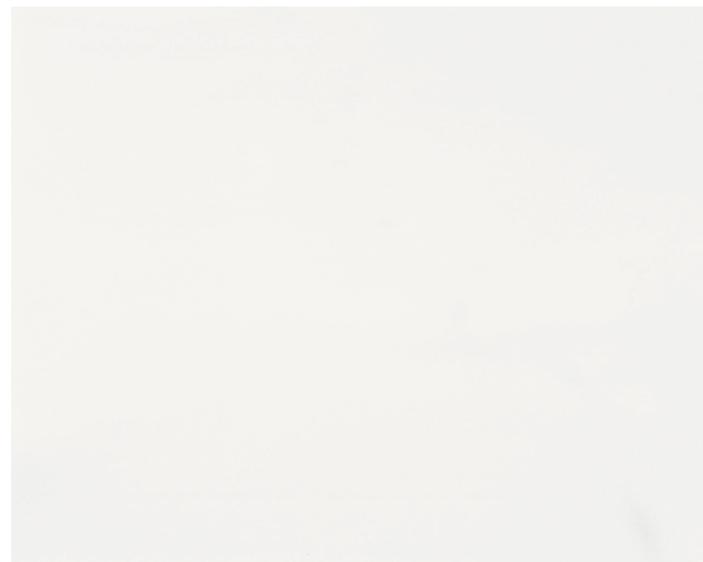
前半)までは主にフィルムカメラが使用され、レンズを通して工学的・光学的に光を取り込まれはしても、フィルム現像や暗室作業の段階でかなり主観的に操作が行われてきた(ある個人が操作がする時、それはかなり曖昧な基準となる)。しかし現代では写真の世界でもデジタルカメラが主流となり急速な技術の進歩は瞬く間に人間の視覚を超越し高精細と呼ばれる領域へと突入し始めた。レンズを通して工学的・光学的に取り込まれた光はその度に明確に数値に置き換えられ、寸分たがわぬ精度でその様をディスプレイモニターに映し出してくれる。ちなみに2010年~2020年の間にも進歩を遂げて来たデジタル機器ではあるが、現在市販されているディスプレイモニターでは再現可能な色数は16,777,216色(RGBそれぞれ256色の組合せ)あり、これは一般的に人間の眼で識別されている色数とほぼ同数であることから True Color と呼ばれている。

私が2008年に発表した「シロイロニマツワル」と云うシリーズがあるのだが、これは画面一杯に『雪』だけを写したシリーズである。通常、絵画的に考えるならば「白」を表現するには「黒」など対照的な色や表現とセットに扱うことで表しやすくなるのだが、私はただ「白い」雪だけを撮影した。このシリーズの制作のきっかけの一つにイヌイットの存在がある。氷雪地帯で生活を続けて来た彼らは私たち日本人と同じ人種のモンゴロイド種であるが、その生活様式から我々日本人が一般的に「白」と定義している色を20色以上に見分けて名前をつけていると云う話を聞いたからだ。その時に人間の視覚には個体差があり本来視えている色や明暗にも大きな差があるはずだろうと云う仮説が立ち上がって来た。

そういえば私が欧州に住んでいた頃に疑問の一つだった、間接照明での生活様式もそのように考えると欧州の人々の青い瞳がおそらく我々より明るい世界を映し出し、アジア人の黒い瞳では彼らより1段階暗い世



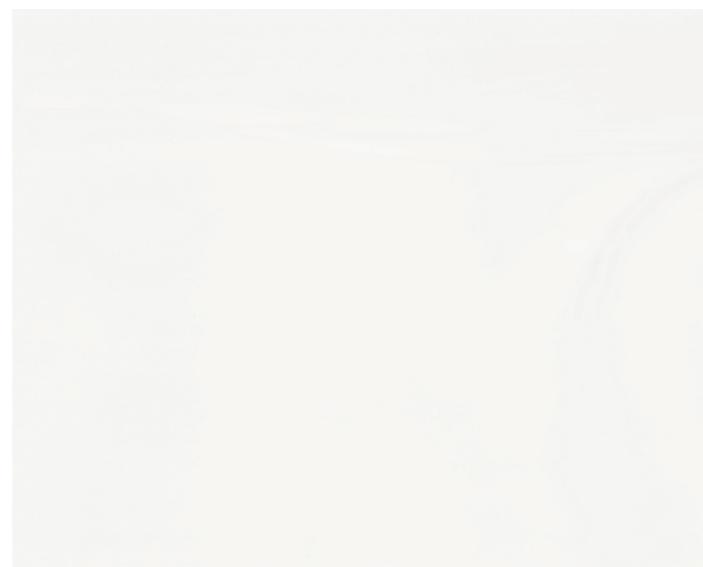
シロイロニマツワル 001 breath, 2008



シロイロニマツワル 002 sign, 2008



シロイロニマツワル 001 transparent, 2008



シロイロニマツワル 002 signpost, 2008

シロイロニマツワルのシリーズをこの様な形で公表した時に1枚1枚の写真の差異に気が付ける人がどれくらいいるのだろうか？  
ネガフィルムから印画紙へのプリントは白色(明るい色)の階調を表すのに最適な手法であり、デジタル写真黎明期を目前に控えたこの時期(2000年代後半)にこそ発表する意味があったと考えている。

界を見ているのではないだろうか？ と理解することが可能となる。

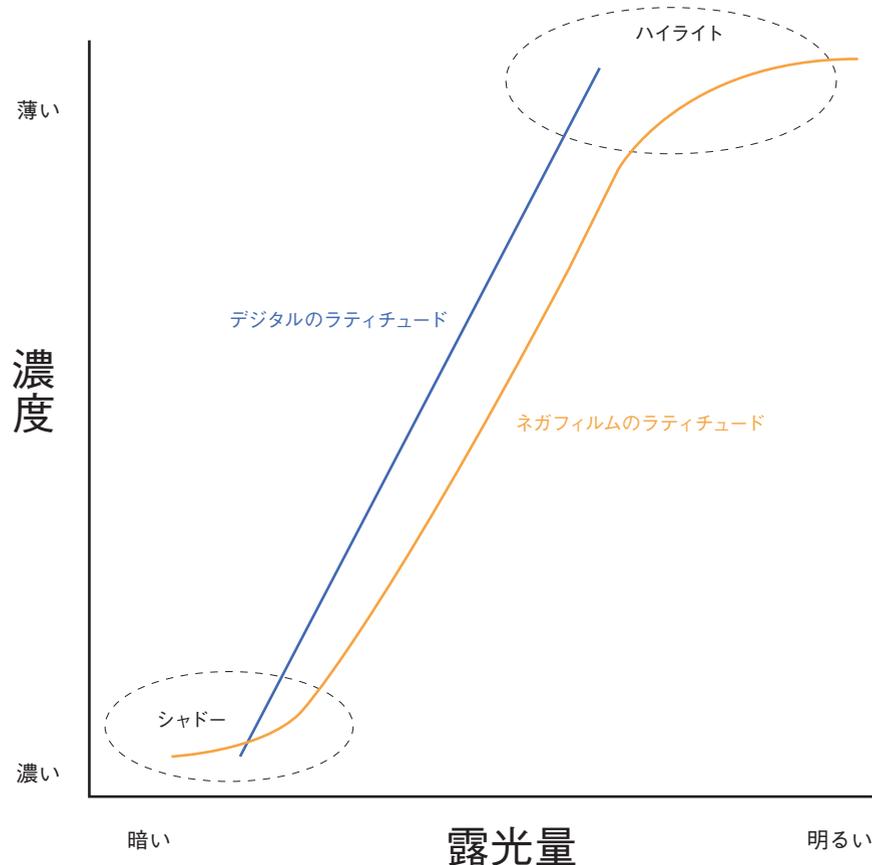
そのように考えると私が「赤」と呼んでいる色を目の前にいるあなたは同じ「赤」として見ているのだろうか？

非常に前置きが長くなったが、デジタルカメラという機械を通して色彩・明暗を数値化して捉える現代にそのような例を系統化して考えたい。というのが今回の研究の出発点である。

「シロイロニマツワル」シリーズ以降に続く連作として色彩をモチーフとして連作を作っていくというアイデアは当初からあったが、そのモチーフを何とするべきか、ということではばらくの間は試作と失敗を繰り返していた。特にこの期間に写真業界はフィルムからデジタルの時代へと大きく変革していったということもあり、フィルム写真を中心に扱って来た私のなかのデジタル写真（の表現力）に対して懐疑的な部分が次のステップへと躊躇させた、しかしステイトメントにも記してあるようにカメラという機械の眼の能力を最大限に引き出すこと、対応する『人』の主観を取り除いたモチーフ、この2点が絶対条件であるということに気がつき『自然』こそがその対象であることが自明となり、自然の色彩をテーマとして扱うことが一番シンプルな回答であると考えた。古来日本では色を表す名前がたったの4色しかなく<sup>(\*1)</sup>、それが自然現象に由来していたということが更に私の考えを後押ししたが、このテーマで扱う色彩は4色に限らない方が幅を狭めないだろうと判断した。

(\*1)  
 明るい / 赤（あかは「明るい」に由来）  
 暗い / 黒（くろは「暗い」に由来）  
 濃い / 白（しろは「しろし（著し）」（はっきりしているという意味）に由来）  
 薄い / 青（あおは「淡い」に由来）

## ネガフィルムとデジタル撮像素子によるラティチュードの違い



一般的に撮像素子はフィルムよりも露光量（光の強さ × 露光時間）の許容範囲が狭いと云われている。

露光量の許容範囲のことを、写真の世界ではラティチュード (latitude) と言います。

図をモノクロ写真で考えてみると理解しやすい。一般的に良い（美しい）プリント（画像）はシャドー部（真黒）からハイライト部（真白）までの階調を余すところなく表現している。もちろんデジタルでもフィルムでも濃度としての階調は黒から白まで存在しているのだが、露光量で見た際に気がつくのは幅の広さである。

特に幅の広さが顕著になるのがシャドー部とハイライト部に現れており、露光量に幅があると云うことは濃淡の中にも階調の差があると云うことを表している。

またハイライト部に関してその露光量の幅広さは歴然である。

シャドー部ではフィルムが徐々に黒が立ち上がっているのに対してデジタルでは突然現れる印象であり、同様にハイライト部ではデジタルが突如飽和して立消え（ゼロ）になるのに対してフィルムではなかなか飽和せず階調が残っていく。

またこの現象は露出の調整の問題ではなく光を記録するシステムの部分に関する問題であると云うことを付け加えておく。

このようにして今回展覧会で発表した2つのシリーズ「空色と水色」、「風を眺める」の制作は始まり、同時に展覧会として成立させるために展覧会設計についてあれこれと思考することとなる。

展覧会を開催するにあたって会場選びは重要な課題である、展覧会をどこのギャラリーで発表するのか? というのは作家としての態度表明でもある。

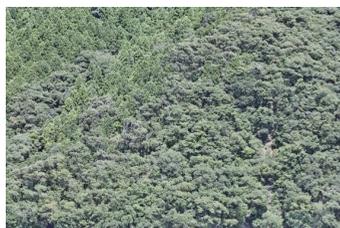
日本ではレンタル(貸し)ギャラリー、コマーシャルギャラリー、企業メセナギャラリーなどが一般的である。私が今回展覧会をした hpgrp GALLERY TOKYO はこの中ではコマーシャルギャラリーに分類される。ギャラリーが展示スペースをはじめとする展示に関わるサポートを行い、作家はある程度作品制作のみに注力することができる、作品がコレクションされればその売り上げを作家とギャラリーで分配する。

hpgrp GALLERY TOKYO は経営母体がアパレルブランドを運営する会社(H.P.FRANCE)であり、且つアートフェアの運営やイベントの開催、百貨店や他分野との共同事業などを積極的に行うギャラリーとしても、現代アートを扱う日本のコマーシャルギャラリーの中では名が知られている、一方で幅広く触手を伸ばすようなやり方に賛否の意見もあるが個人的にはより多くの人へ届けようとする態度に好感を持っている。このギャラリーでの発表は2度目となるが、前はギャラリースペースではなく会社が運営する店舗内での展示だったので、実質初めての個展でもある。

一旦話は逸れるが、私は別のスペースでギャラリーディレクターとしての仕事を10年しているのが、自身が運営に関わっているギャラリーでの展覧会はこれまでに選択肢には入れたことはない。これには明確な理由があり、自分が運営しているところでの展覧会は正当な評価に繋がらないと判断しているからである。

PRESS RELEASE

2019年8月吉日



空色と水色 / 風を眺める

鈴木 一成 Kazushige SUZUKI

2019年9月13日(金)～9月28日(土)  
クロージングパーティー  
9月28日(土) 19:00-21:00

上「空色と水色 / Sky Blue / Aque Blue」  
下「風を眺める / View the Wind」

hpgrp GALLERY TOKYOより、鈴木一成個展「空色と水色/風を眺める」の開催をご案内申し上げます。  
3年間の渡仏生活を経て、帰国後フォトグラファーとして国内を中心に活躍する鈴木一成。今回の展示では、知覚と体験をテーマにした新たな写真表現として、新作となる2シリーズをご紹介します。  
生活の中で視覚から受容される数多の情報は、意識しなければそのほとんどが記憶に残ることはありません。一方、その瞬間を正確に切り取る写真表現では、些細な情報でさえその場の一部として鮮明に記録されます。鈴木は、そのような人の知覚の曖昧さと写真としての明確さとのギャップをテーマに制作しています。  
今回発表するシリーズ「空色と水色」では、ともに“青”を連想させる空と水をモチーフに、空の風景を水を張った鏡に反射、透過させながら撮影します。そこに切り取られた風景は、何色と表現されるのでしょうか。また、もう一つのシリーズ「風を眺める」では、一面に揺らぐ木々が撮られています。遠景としては“山”であり、近寄れば“森”となり、間近に行けば“木”にもなる風景を、スローシャッターで葉の形を認識させることなく撮影することで、色彩の情報として切り取られます。それらを眼前に提示された時に、私たちは情報をどのように受容するのでしょうか。  
時間軸や撮影方法によって風景に抽象度を加えることで、知覚の曖昧さとの共通項が生まれ、写真が単なる記録媒体ではなく、表現技法として問いを投げかけられます。ぜひこの機会にご高覧ください。

hpgrp  
GALLERY TOKYO

PRESS RELEASE

2019年8月吉日

鈴木 一成 Kazushige SUZUKI

Photographer, Artist  
1972年 東京生まれ  
1995年 桑沢デザイン研究所 写真研究科卒業、1995-1998年 渡仏

AZ株式会社 取締役  
Gallery OUT of PLACE TOKYO ディレクター (2009年～)  
専門学校桑沢デザイン研究所 非常勤講師 写真基礎 (2012年～2015年)  
専門学校桑沢デザイン研究所 専任教員 ビジュアルデザイン分野 (2016年～)

[略歴]

- 2018 「ばうはうす 光・影・カタチ」 専門学校桑沢デザイン研究所 くわかべ(東京)
- 2015 グループ展 シャッターマガジン主催「ALTERNATIVE!」(東京)
- グループ展 「no-nen ちゃん来て来て展」 新宿眼科画廊(東京)
- 2014 グループ展 「何も考えないまま10年経ってた・・・」 新宿眼科画廊(東京)
- 東京デザイナーズウィーク SHOP ART WALK 参加(東京)
- 2013 個展 IOSSELLIANI T-02-10S (東京)
- グループ展 「しらはまっ」 新宿眼科画廊(東京)
- グループ展 「おらたち、あまちゃんが出来て来て!!」 新宿眼科画廊(東京)
- 2009 グループ展 「雪-snow-五つのユキのあり方」 Gallery OUT of PLACE(奈良)
- Shibuya1000 参加(東京)
- グループ展 「シブヤスタイル」 西武渋谷店画廊(東京)
- 2008 個展 「シロイロにマツル」 LUBERO(東京)
- 2006 「OFF カウパレード展」(東京)
- 2005 個展 「LESS IS MORE」 Caffè Benvenuto(東京)
- 2004 個展 「DAYS・REAL・NIGHTS」 NOOK(東京)
- 2001 個展 「GHOSTLY DIMENSIONS」 YAB-YUM BOTIQUE(東京)
- 1999 個展 「思考 そここにいるコト」 mole ギャラリー(東京)
- 1996 「若者達の視線」 Mois Off de la Photo(パリ)

hpgrp GALLERY TOKYO (エイチピージーアルピー ギャラリートウキョウ)

〒107-0062 東京都港区南青山5-7-17 小原流会館 B1F  
03-3797-1507  
art@hpgrp.com  
http://hpgrpgallery.com  
営業時間 12時～20時  
日曜・月曜 休廊



hpgrp  
GALLERY TOKYO

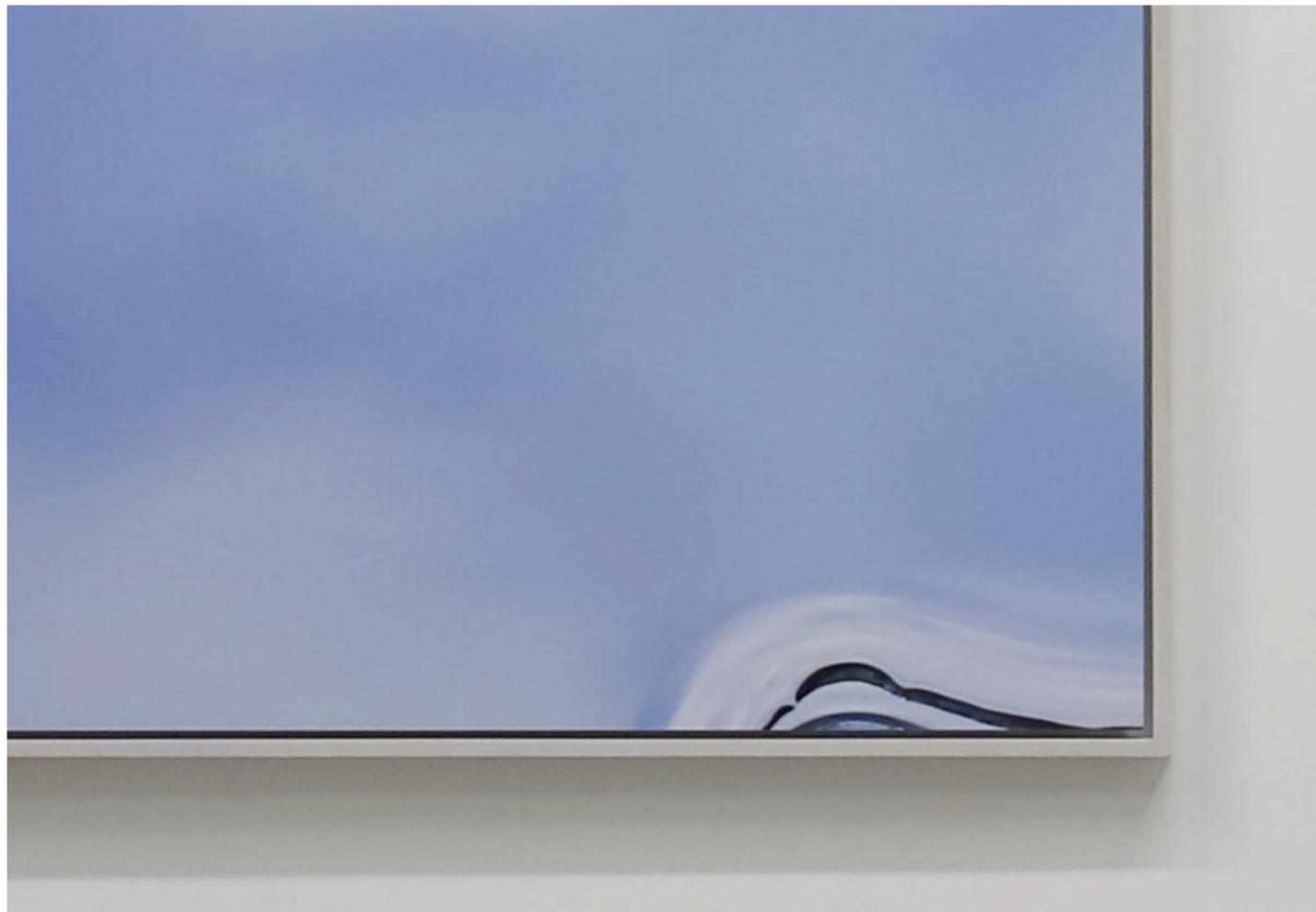
ギャラリーも作家もそれぞれが矜持を保って作品を発表し観客（コレクター）に評価を問うのがギャラリーというスペースである。

作品を展示するためにはギャラリーへの自作品のプレゼンに始まり展覧会の設計、プレスリリースや展覧会内でのイベントの有無の決定 / セットアップなどやらなければならない仕事は数多くある、このようなことを如何にしっかりと準備するのかということも評価に関わってくる。もちろん 1 番重要なのは作品を完璧なフィニッシュに導くことである。

そのような意味では今回の展示では作品の額装についても記しておかなければならない。通常写真作品を額装する場合には裏打ちした作品の上に窓を開けたマットを挟み、その上にガラスやアクリルで作品を保護する。しかしガラスやアクリルは反射を生むので、作品を観てもらうことにはあまり適していない。（もちろん低反射ガラスを使うという選択肢もある）今回発表した大きい作品のサイズは 100 x150cm と写真作品の中では巨大な部類に入る。展覧会での展示はその空間に対して如何に美しく配置するのかということが個人的には重要だと思っているので、シンプルでありながら格式があるような額装にしたいと考えた。額装の業者とも幾度かの相談を繰り返し、額の中に裏打ちした作品を浮かして額のフレームまで僅かな隙間を作り作品に対しては華奢なフレームで囲むだけという、作品保護の観点は無視した装飾としての額装をオーダーした。

結果的にはこの額装は非常に評判が良く、質問されることも多かった。

また空間に対しては非常にシンプルに二つのシリーズを淀みなく並列的に観てもらえるように配置した。また空間の奥にある特徴的な細長い廊下のような壁面に過去作である「シロイロニマツワル」を展示することで、通底したテーマ性を感じてもらえるように配慮した（このアイデアはギャラリーディレクターによるもの）。



額と作品の関係は目的によって大きく変わるが、今回の展示では平形アルダー白磨きという仕様。

裏打ちされた作品は 20mm のゲタを履かせ額の中で中空に浮いている様に見える。

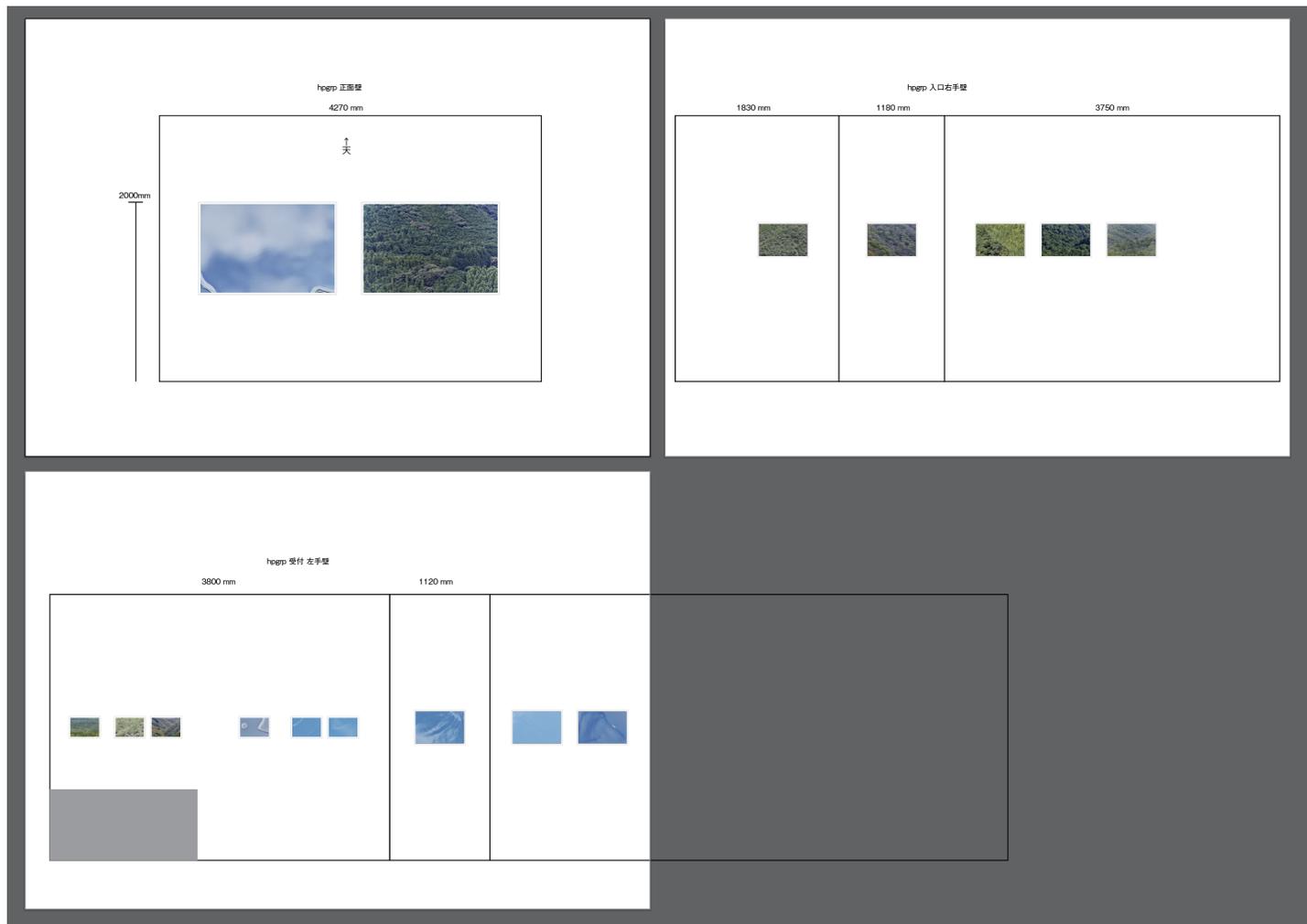
1000 × 1500mm サイズでは額幅は 23mm、それ以下のサイズでは額幅 18mm とした。

作品と額には 1000 × 1500mm サイズでは 7mm の隙間、それ以下では 5mm の隙間を設定することで鑑賞者に緊張感を促した。

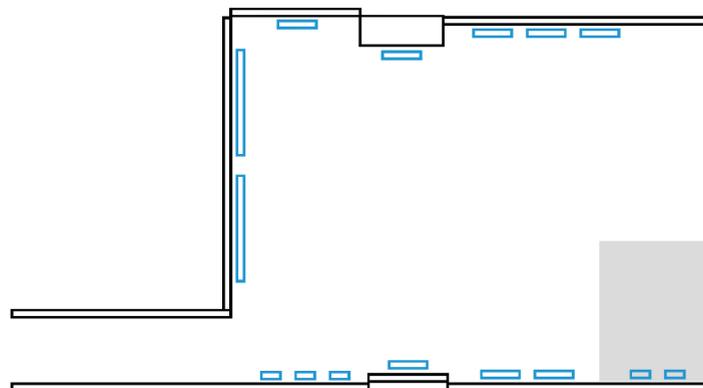
背面はパネル仕立てで独鉋を付けておく、搬入・設置時に作業効率がかなりあがる。

展覧会の会期中9月20日(金)には、キュレーターの小高美穂さんをお招きしてトークショーを行った。このトークでは私の作品制作に対するコンセプトと写真というメディアの特性についてが主なテーマだった。小高さんとのトークで重要だと思われる点を簡潔に記しておく。

- ・みる という事についての考察
- ・ミニマルで抽象的な表現
- ・制約をコンセプトに持ち込む
- ・自分の視点を獲得する
- ・みたことがある≠みえている
- ・現実から新たなストーリーを作る or 現実にあるストーリーを掬い上げる
- ・体感することは撮影すること
- ・写真の情報を鑑賞者に強いるのか
- ・聖地と水鏡の関係
- ・不可抗力をどの様に受け入れるのか
- ・シャッターを切るタイミングについての考察
- ・みる についての要素
- ・みえないから見出す(シロイロニマツワル)
- ・みえるから、みえないものを見出す(風を眺める)
- ・不在をみようとする(水色と空色)
- ・眼(視力)の个体差
- ・色と概念(例:冠婚葬祭における白と黒の概念の逆転)
- ・光の色(明度=クリア)
- ・鑑賞者には作品として提示されてからストーリーが始まる
- ・人間がみることのできる世界、できない世界
- ・写真家としてのアウトプットのサイズと鑑賞者がどの距離からみるのか? 身体性がフォーカスの代わりになる可能性
- ・サイズとフォーカス、身体性のフォーカス
- ・写真と絵画におけるフォーカスの規定
- ・明度の興味から色彩、色と色の間にあるもの
- ・正確さと曖昧さ



個展展覧会の為の設計図



- ・写真の記録性
- ・現代の写真は(まさに今を)共有する、写真を過去にしていく作業
- ・映えるという美意識(共有写真の登場以降)
- ・平均化される価値観
- ・メイクする写真、セレクトする写真の差
- ・動画と写真の狭間
- ・写真の平面性と物質感について

展覧会自体は本校の教職員・学生や卒業生を含め多くの関係者、およびアート関係者も想像以上に観覧に訪れくれたこともあり現場でのコミュニケーションを含め新たな課題や考察ができたことは収穫であった。またこの展覧会を契機にWebsiteも立ち上げた。

<https://suzuki-kazushige.com/>

こちらは作品コンセプトを中心に website においても「視る」という事について考察していただけるつくりになっている。

今回の研究を今後の制作にも活かして邁進していきたい所存である。

研究期間：2018年3月20日 - 2020年3月31日

主な取材先：ドイツ(ベルリン、デッサウ)、オーストラリア(シドニー)、伊勢、熊野、出雲、広島、福島、根室および道東エリア

#### 展覧会詳細

鈴木一成 個展 「空色と水色 / 風を眺める」

開催日：2019年9月13日(金) - 28日(土)

会場：hggrp GALLERY TOKYO

トークショー：9月20日(金) 19:00 - 20:00

トークショウゲスト：小高美穂(キュレーター)

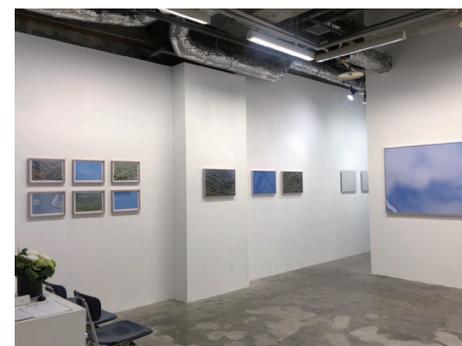
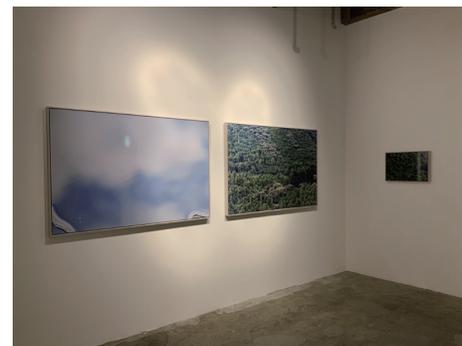
クロージングパーティ：9月28日 19:00 - 21:00

来場者数：600名(概算)

リーフレット制作：direction Q、デザイン / 沼本亜希子

Website デザイン：吉田結

Website Coding：株式会社 Lucky Brothers & co. 田島真悟



1 段目：個展設営時の様子 / 撮影：hggrp GALLERY スタッフ

2 段目：個展設営時の様子

3,4 段目：個展会場の様子

